

卷第二 述少陽病

述少陽病

少陽篇在陽明後、戴氏證治要訣、嘗有疑詞、而未覈、喻氏則曰、陽明去路、必趣少陽、最屬牽強、愚亦嘗疑篇次為後人改、以今觀之、殊覺不然、蓋少陽病、仲景以為半表裏之目、而其證與治、既拈于太陽篇、纖悉無遺、唯其名、則取之內經、是以要摘其概、猶列之陽明之後、殆存羊之意云爾、今此述、先之於陽明者、在使人易知傳變之敘已、

少陽篇は陽明後に在る、戴氏證治要訣に、嘗て疑詞有れども、未だ覈明らかにせず、喻氏則ち曰く、陽明去路^{行程}、必ず少陽に趣^{おもむ}くと、最も牽強^{こじつけ}に屬すと、愚私亦嘗て篇次^{書物の部分けの順序}を後人改を為すを疑う、今以て之を觀るに、殊に然らざるを覺^さとる、蓋し少陽病、仲景以て半表裏の目^{かなめ・細別}と為して、其證治を與える、既既に太陽篇に拈^{挟み}入れる、纖悉^{センシツ・細か}いとこゝろ^いきとどくこと^{遺失}無し、唯其名、則ち之を内經^{素問熱論(太陽—陽明—少陽)}に取る、是以て要^更に其概を摘^とる、猶之を陽明に後列するは、殆んど羊^{さま}ようを存するの意云う爾^{のみ}、今此述、之を陽明に先んずるは、人をして傳變の敘^{叙述}を知るを易^{やす}からしめるに在る已^{のみ}、

少陽病者、半表裏熱證是也、

少陽病とは、半表裏熱證是也、

半表半裏者、即表裏之分界、其稱蓋昉自成氏、曰、病有在表者、有在裏者、有在表裏之間者、此邪氣在表裏之間、謂之半表半裏證、方氏演之曰、少陽者、邪過肌肉而又進、則又到驅殼之内、藏府之外、所謂半表半裏也、半、不也、不表不裏者、隙地也、柯氏意亦同、並是、如程氏分半表與半裏為說、恐失之鑿矣、

半表半裏とは、即ち表裏の分界^{さかい}、其稱^{名付け}蓋し成氏自より昉^{あきら}らか、曰く、病が表に在る者有り、裏に在る者有り、表裏の間^間に在る者有り、此邪氣が表裏の間に在る、之を半表半裏證と謂う、方氏之を演^{おしひろ}めてして曰く、少陽とは、邪が肌肉を過ぎて又進めば、則ち又驅殼^{からだ}の内、藏府の外に到る、所謂^{いわゆる}半表半裏也、半、不也、不表不裏者、隙^{ゲキ}・すきま地也、柯氏意亦同、並是、程氏の半表を半裏と分ける説を為すが如き、恐らく之を鑿^きりひらくするを失う矣、

○太陽下篇第二十一條曰、必有表復有裏也、又曰此為半在裏半在外也、蓋所謂表與外者、俱指少陽、非太陽之謂、故與小柴胡湯、所謂裏者言、即言陽明、故曰大僂^便、曰設不了了者、得屎而解、可知其與不表不裏、自異其義、柴胡加芒消湯條、陽明中風條、外字、並言少陽、亦可互證、前注於彼條、不敢剖析、仍附辨于此、

○太陽下篇第二十一條*曰「必有表復有裏也」又曰「此為半在裏半在外也」蓋し謂う所の表と外とは、俱に少陽を指す、太陽の謂に非ず、故に小柴胡湯を與える、所謂裏とは、即ち陽明を言う、故に「大僂^便」と曰い「設不了了者、得屎而解、」と曰う、其不表不裏と、

自ら其義を異にするを知るべし、柴胡加芒消湯條**、陽明中風條***の「外」字、並少陽を言う、亦互證たるべし、前注を彼條に於いて、敢えて剖析^{ホウセキ・わかちさく・解決する}せず、仍^なお此に附辨す、

*太陽下篇第二十一條「傷寒五六日 頭汗出 微惡寒 手足冷 心下滿 口不欲食 大便鞭 脈細者 此為陽微結 必有表復有裏也 脈沈亦在裏也 汗出為陽微 假令純陰結 不得復有外證 悉入在裏 此為半在裏半在外也 脈雖沈緊 不得為少陰病 所以然者 陰不得有汗 今頭汗出 故知非少陰也 可與小柴胡湯 設不了了者 得屎而解」

**太陽中篇七十八條「傷寒十三日不解 胸脇滿而嘔 日晡所發潮熱 已而微利 此本柴胡證 下之以不得利 今反利者 知醫以丸藥下之 此非其治也 潮熱者 實也 先宜服小柴胡湯以解外 後以柴胡加芒消湯主之」

***陽明病五十條「陽明中風 脈弦浮大 而短氣 腹都滿 脇下及心痛 久按之氣不通 鼻乾 不得汗 嗜臥 一身及目悉黃 小便難 有潮熱 時時噦 耳前後腫 刺之小差 外不解 病過十日 脈続浮者 与小柴胡湯」

其來路必自_{太陽}、而不問_{中風傷寒}矣、蓋其病、邪氣不_レ藉_レ物而結、但其人陽盛、故邪正相持、熱留_レ脅下_レ、

其來路必ず太陽に自_よれども、中風傷寒を問わず矣、蓋し其病、邪氣が物を藉_{かり}ずにて結す、但其人陽盛ん、故に邪正相持^{ソウジ・勢力同じで張り合う}、熱脅^{胸の兩側・脇下}に留_{まる}、

半表半裏之地、蓋專係_レ脅下_レ、而連_レ及_レ胸脅_レ、曰、血弱氣盡、腠理開、邪氣因入、與_レ正氣_レ相搏、結_レ於_レ脅下_レ、曰、胸脅苦滿、曰、胸滿脅痛之類、可_レ以_レ見_レ也、且成氏曰、邪氣自_レ表傳_レ裏、必先自_レ胸膈_レ、已次經_レ心脅_レ而入_レ胃、然則邪之離_レ表未_レ入_レ胃者、必客_レ胸脅_レ也明矣、

半表半裏の地、蓋し専ら脅下に係わりて、胸脅に連_及^{連なり及ぶ}、曰「*血弱氣盡、腠理開、邪氣因入、與正氣相搏、結於脅下、」曰「**胸脅苦滿」曰「***胸滿脅痛」の類、以て見るべき也、且つ成氏曰く、邪氣表自_{より}裏に傳わるに、必先_{必ず先んじて}胸膈自_り、已次^{順序によって}心脅を経て胃に入ると、然れば則ち邪の、表を離れて未だ胃に入らざる者は、必ず胸脅に客する也^は明矣、

*太陽病中六十九條「血弱氣盡 腠理開 邪氣因入 與正氣相搏 結於脇下 正邪分爭 往來寒熱 休作有時 噤噤不欲飲食 臟府相連 其痛必下 邪高痛下 故使嘔也 小柴胡湯主之」

**太陽病中六十八條「傷寒五六日中風 往來寒熱 胸脇苦滿 噤噤不欲飲食 心煩喜嘔 或胸中煩而不嘔 或渴或腹中痛 或脇下痞鞭 或心下悸 小便不利 或不渴 身有微熱 或欬者 小柴胡湯主之」

***太陽病中篇七條「太陽病 十日以去 脈浮細而嗜臥者 外已解也 設胸滿脇痛者 与小柴胡湯 脈但浮者 与麻黃湯」

其證既無_レ表候_レ、亦非_レ裏實_レ、故不過_レ口苦咽乾目眩、往來寒熱、其證既に表候無く、亦裏實に非ず、故に口苦咽乾目眩、往來寒熱を過_{こえる}ぎず、

正氣為_レ邪斂束而寒、邪氣與_レ正相搏而熱、邪氣遂不_レ能_レ服_レ正氣_レ、正氣亦不_レ能_レ逐_レ邪氣_レ、_互分爭、此往來寒熱之機也、

正氣が邪の為に斂束して寒、邪氣が正と相搏_{うち}て熱、邪氣遂に正氣を服_し^{しが}わせる能_わず、正氣亦邪氣に遂_{した}^がう能_わず、_互に互いの分爭_{わかれて}争_う、此往來寒熱の機_{から}くり也、

胸脅苦滿

苦満者、言_下如_二有物填満_一、而苦惱難_上忍、此病人自覺之情、非_二外測所_一得、金匱有_二苦喘、苦重、苦痛、苦冒等文_一、其義相同、其云_二胸満_一、云_二胸脅満_一、俱省文也、或謂満、瀧通、果然則胸瀧與_二心煩_一何別、且脅而云_レ瀧、意義不_レ通、其說難_レ從、

苦満とは、物が有り填満する如きにて、苦惱忍び難きを言う、此病人自覺の情_{ようす}、外測で得る所に非ず、金匱に苦喘、苦重、苦痛、苦冒等文有り、其義相同、其胸満と云い、胸脅満と云う、俱に省文也、或人謂うに満、瀧_{もだえ苦しむ}に通ずと、果たして然りなれば則ち胸瀧は心煩と何ぞ別ならんや、且つ脅にして瀧と云うは、意義通ぜず、其說従い難い、

嘿嘿不_レ欲_二飲食_一

軒邨曰、嘿嘿者、不_レ欲_二飲食_一貌、猶鬱鬱微煩之例、厥陰篇亦云、嘿嘿不_レ欲_レ食、

軒邨*曰く、嘿嘿とは、飲食を欲せざる貌_{ようす}、猶鬱鬱微煩の例のごとし、厥陰篇亦云、**嘿嘿不欲食、

*軒邨^註寧熙 のきむらやすひろ (1789--1822) 駿河の人、多紀元簡の門人。卷第一叙述参照

**厥陰病十四條「傷寒熱少微厥 指一作稍頭寒 嘿嘿不欲食 煩躁數日 小便利色白者 此熱除也 欲得食其病為愈 若厥而嘔 胸脇煩満者 其後必便血」

心煩

煩、熱悶也、詳開_二于兼變熱鬱中_一、

煩、熱悶也、詳しくは兼變・熱鬱中を開け、

喜嘔等、其脈亦不_レ數不_レ大而弦、

喜嘔等、其脈亦數ならず大ならずして弦、

本篇第三條云、傷寒脈弦細、所_レ謂細者、緊細之細、非_二微細之細_一、金匱曰、瘧脈自弦、亦相互發、亦陶華_{六書}、有_下以_二浮中沈三法_一、候_二邪淺深_一法_上、以_レ中屬_二少陽_一、

本篇第三條云「傷寒脈弦細*」所謂細とは、緊細の細、微細の細に非ず、金匱_{瘧病脈證四}曰「瘧脈自弦」亦相互いに發明らかにするす、亦陶華_{六書}、浮中沈三法を以て、邪の淺深を候_うかがう法有り、中を以て少陽に屬_属す、

*少陽病三條「傷寒脈弦細 頭痛發熱者 属少陽 少陽不可發汗 發汗則識語 此属胃 胃和則愈 胃不和煩而悸」

皆為_上邪客_二隙地_一之驗_上、是以汗吐下、俱在_レ所_レ禁、而白虎之寒、藥力過重、其唯小柴胡湯、以清_二解之_一、實為_二正對_一矣、

皆邪が隙地に客するの驗_{しるし}と為す、是以てするに汗吐下、俱に禁ずる所在りて、白虎の寒、藥力過重、其唯小柴胡湯、以て之を清解、實_{まこと}に正對_{正しく}應_{える}を為す矣、

湯之意、明理論所_レ釋稍當、今_更詳_レ之、柴胡為_レ物、固非_二芩連之寒_一、亦非_二麻葛之發_一、然其性微寒、而能豁壅鬱、故於清_二解少陽_一、適然相應、但其力稍緩、故佐以_二黃芩_一、其喜嘔者、似_二是派證_一、然胃氣不_レ安、則柴芩不_レ得_レ擅_二其力_一、是所_二以用_二半夏生薑_一也、人參動輒住_レ邪、故前輩或去不_レ用、或曰、既與_二柴芩_一相配、且去_レ滓再煎、則性味混和、啻能助_レ胃、而不_レ敢攔補、即七味相藉、以為_二少陽正方_一、此言似_レ合_レ理、徐氏曰、兼_二半夏生薑_一、有飲而嘔逆也、兼_二參甘棗_一、而調_二其陰陽_一、小柴胡得_レ擅_二和解之功_一、實賴_レ

此也、斯說亦妥、又本湯、成氏以來、稱為「和解」、然經中曰「和曰解」、所「指不」一、且無謂此方為「和解」者、此蓋為「清劑中之和者」、若專稱「和解」、恐不「允當」、但相沿既久、難「得改易」爾、錢氏曰、雖「後人之補中益氣湯、及逍遙散之類」、其外「一發清陽」、開「一解鬱結」之義、亦皆不離「小柴胡之旨也」、信然、又金鑑、辨「下」世俗濫用此方之弊「上」、楊士瀛嘗有「其說」、既拈「于拙著廣要中」、宜「參」、

此小柴胡湯の意、成無己著明理論釋とく所稍「や」當たる、今更に之を詳つまびらかにす、柴胡物為たる「や」、固く黄芩黄連の寒に非ず、亦麻黄葛根の發に非ず、然り其性微寒にして、能く壅鬱を豁カツ・とりぞく、故に少陽を清解するに於いて、適然ちようど相應ず、但し其力稍緩、故に佐に黄芩を以てす、其喜嘔者、是派派生證に似る、然れども胃氣不安なれば、則ち柴胡黄芩其力を擅セン・ほしいままにするを得ざれば、是半夏生薑を用いる所以也、人參動やもすれば輒たやすく邪を住とどめる、故に前先輩或いは去って用いず*、或人曰く、既に柴胡黄芩と相配、且つ滓を去り再煎すれば、則ち性味混和、啻ただに能く胃を助けて、敢えて補を攔さえぎらず、即ち七味相藉たのみとする、以て少陽正方を為すと、此言理に合うに似る、徐氏曰く、半夏生薑を兼あわせて、飲有りて嘔逆する也、參甘棗を兼あわせて、其陰陽を調べ、小柴胡は和解の功を擅ほしいままにするを得る、實に此に頼る也と、斯この說亦妥當、又本湯、成氏以來、稱するに和解を為すと、然れども經中に和と曰い解と曰うは、指す所一つもあらず、且つ此方を和解を為すと謂う者ところ無し、此蓋し清劑中の和なるものと為す、若し専ら和解と稱するは、恐らく允當イントウ・正しく道理にかなうせず、但相沿しきたりに従う既に久しく、改易を得難き爾のみ、錢氏曰、後人の補中益氣湯、及び逍遙散の類と雖も、其清陽を外發、鬱結を開解するの義、亦皆小柴胡の旨を離れざる也と、信まことに然り、又金鑑、世俗此方を濫用するの弊を辨ずる、楊瀛エイ嘗て其說有り、既に拙著傷寒廣要中に拈引用、宜しく參すべし、

*「傷寒論攷注」太陽中篇六十八條に以下の文有り。

千金方 治傷寒中風五六日已上、但胸中煩乾嘔、栝樓湯方、

栝樓實一枚 黄芩 甘草各三兩 生薑四兩 大棗十二枚 柴胡半斤

案今人用小柴胡湯往往去人參、宜以此方為嚆矢コウシ・ものはじまり、

邪毒増劇、耳聾目赤者、此為「少陽中風」、

邪毒増さらに劇はげしく、耳聾目赤者、此少陽中風*と為す、

*少陽篇二條「少陽中風、兩耳無所聞、目赤、胸中滿而煩者、不可吐下、吐下則悸而驚、」

少陽中風、注家概謂為「太陽中風傳來者」、然中風之名、經無「定例」、且病至「兩耳無」所聞目赤、則明是表既解、而少陽之邪増劇、熱氣上熏者、較「之柴胡正證」、其病更加「一層」、近今此證甚多、必併「用黄連解毒」、方為「合轍」、蓋以「風為」陽、故又以為「熱盛之稱」乎、

少陽中風、注家概おおむね謂おもうに太陽中風傳來者と為す、然れども中風の名、經に定例きまり無し、且病「兩耳無所聞目赤」に至れば、則ち明らかに是表既に解して、少陽の邪増さらに劇しく、熱氣上熏者、之を柴胡正證と較べれば、其病更に「一層かさね」を加える、近今此證甚だ多し、必ず黄連解毒を併用、方まさに合轍常道にあうを為す、蓋し風を陽と為すを以ての故

に、又以て熱盛んの稱と為す乎、

如其兼表未^レ解者、其等有^レ三、病勢加進、兼裏實、有^レ三等、具列如^レ左、兼表未^レ解者、其等有^レ三、何、其一、小柴胡條、所謂或不^レ渴、身有^レ微熱、及傷寒四五日、身熱惡風、是也、此表證既輕、將^レ併^レ少陽、故不^レ別須^レ汗藥也、其一、柴胡桂枝湯證、是也、此太少二病、輕重相均、故治取^レ雙解、

如^もし其兼表未解者、其等に三有り、病勢加進、裏實を兼ねて、三等有り、具列するに左下の如し、表未だ解せざるを兼ねる者、其等に三有り、何か、其一、小柴胡條、謂う所の*「或不渴、身有微熱」及び**「傷寒四五日、身熱惡風」是也、此表證既に軽く、將に少陽を併す、故に別に汗藥を須^もちいざる也、其一、柴胡桂枝湯證、是也、此太陽少陽二病、輕重相均^{ひと}しい、故に治するに雙^双解を取る、

*太陽中篇六十八條「傷寒五六日中風 往来寒熱 胸脇苦滿 嘔嘔不欲飲食 心煩喜嘔 或胸中煩而不嘔 或渴 或腹中痛 或脇下痞鞭 或心下悸 小便不利 或不渴 身有微熱 或欬者 小柴胡湯主之」

**太陽中篇七十二條「傷寒四五日 身熱惡風 頸項強 脇下滿 手足温而渴者 小柴胡湯主之」

柯氏謂表證微、是、蓋微嘔、少陽證亦微、

柯氏表證微と謂う、是とする、蓋し*微嘔、少陽證亦微、

*太陽下篇十九條「傷寒六七日 發熱 微惡寒 支節煩疼 微嘔 心下支結 外証未去者 柴胡桂枝湯主之」

其一、柴胡桂枝乾薑湯證、是也、此以^レ嘗經^レ錯治、邪氣未^レ解、而^レ更^レ津液不足者也、

其一、柴胡桂枝乾薑湯證、是也、此嘗て錯^誤治を経るを以て、邪氣未だ解せざるにて、更^更に津液不足者也、

互見^レ飲邪併結中、當^レ參、

互に飲邪併結中に見る、當に^{傷寒論述義卷四を}參すべし、

病勢加進、兼^レ裏實者、亦有^レ三等、何、其一、大柴胡湯證是也、此小柴胡證、而邪熱壅實、既併^レ陽明、故清解中、兼以^レ疎^レ裏、

病勢加進、裏實を兼ねる者、亦三等有り、何か、其一、大柴胡湯證是也、此小柴胡證にして、邪熱壅實、既に陽明を併^あわせる、故に清解中、兼ねて以て裏を疎^{疏通}さす、

此湯之證、最多有^レ之、不^レ必拘^レ下後、軒熙曰、過經、猶^レ言^レ過表、存^レ攷、心下急、急字無^レ明解、柯氏曰、急者、滿也、猶不^レ了、攷急、是緩之對、蓋謂^レ有^レ物窘迫之勢、非^レ拘急之謂、李氏脾胃論曰、裏急者、腹中不^レ寬快、是也、蓋所^レ謂^レ不^レ寬快者、以釋^レ裏急、則未^レ爲^レ當、而於^レ心下急、則其義甚褊、桃核承氣條、少腹急結之急、亦同義也、此方芍藥、蓋取^レ之通^レ壅、宜^レ參^レ後桂枝加芍藥湯、

此湯^{大柴胡}の證、最も多く之れ有り、必ずしも下後に拘らず、軒熙曰く、*過經^{太陽經を過ぎ表證無し・森田幸門「傷寒論入門」}、猶過表と言うがごとしと、攷考を存^たもつ、「*心下急」急字明解無し、柯氏曰く、急者、滿也、猶は^はっきりせず、急を攷するに、是緩の對^{對句}、蓋し物有り窘迫^{キンバク}・さしせまるの勢を謂う、拘急^{拘攣}の謂に非ずと、李氏脾胃論曰く、裏急は、腹中寬快ならずと、是也、蓋し所謂寬快ならざる者、以て裏急と釋^とけば、則ち未だ當^中を爲さざれども、心下急に於いては、則ち其義甚だ褊^{シン}・びったり、桃核承氣條の少腹急結^{痙攣的な疼痛「傷寒論入門」}の急、

亦同義也、此方^{大柴胡湯}の芍薬、蓋し之れ壅を通ずると取る、宜しく後桂枝加芍薬湯を參すべし、

* 太陽中篇七十七條「太陽病 過經十餘日 反二三下之 後四五日 柴胡証仍在者 先與小柴胡湯 嘔不止 心下急 鬱鬱微煩者 為未解也 與大柴胡湯 下之則癒」

心下急・心下部が周囲から絞扼されたごとく差し迫って「傷寒論入門」

○陶氏本草序例曰、枳實若干枚者、去^レ穢畢、以_一一分_一準_二枚_一、據^レ此、此方枳實四枚、準_一今一分七釐七毫六絲_一、比_一他藥_一殊輕、大小承氣、枳實梔子湯、並稱_一幾枚_一、而其舉_一分量_一者、麻人丸則半斤、四逆散則各十分、仍知仲景用_一枳實_一、本不_一甚輕_一、陶說可^レ疑、

○陶^{弘景}氏本草「本草經集注」序例曰「枳實若干枚者、去穢^{たね}畢^終、以一分準二枚、」此に據^よれば、此方^{大柴胡湯}枳實四枚、今一分七釐七毫六絲に準ずる、他藥に比して殊^{こと}に軽い、大小承氣、枳實梔子湯、並幾枚と稱して、其分量を擧げる者、麻人丸則ち半斤、四逆散則ち各十分、仍^よつて仲景枳實を用いるを知る、本甚だ輕からず、陶說疑うべし、

○此方再煎、其義難^レ 哲、俟^レ 攷、

○此方^{大柴胡湯}再煎、其義^{あきらかに}すること難^{むずか}しい、攷^考を俟^待つ、

其一、柴胡加芒消湯證、是也、此其壅實稍輕於前證、而以丸藥之故、裏邪膠固、殆屬壞病、
其一、柴胡加芒消湯證、是也、此其壅實稍前證より軽い、しかれども丸藥*の故を以て、裏邪膠固^{コウコ・にかわでつけたようにかたい}、殆んど壞病に屬す、

此條難讀、然程注頗明覈、但此實得_一之攻後_一云云者、殊似_一含混_一、蓋此證本是少陽陽明併病、以_一用下失^レ法、徒擾_一腸胃_一、而邪與實、依然具存者、程又曰、去者非^レ所^レ 雷、雷者非^レ所^レ 去、故澹者自澹、結者自結、而結者既結、澹者益澹矣、此說反覺_一直切_一、又此證既是兼^レ裏、乃似^レ宜_一蚤從_一大柴胡雙解之法_一、而先用_一小柴胡_一者、蓋以_一丸藥誤下_一、不^レ欲_一續以_一快藥_一、仍姑清和、以待_一胃安_一也、且其下利、故壅實輕_一於大柴胡證_一、而燥結則有^レ甚、是以不^レ藉_一大黃之破^レ實、而殊取芒消之軟^レ堅矣、校以此方_一以為_一大柴胡加芒消_一、原出于黃氏_一、而宗印亦有_一其說_一、

此條*讀み難い、然れども程注頗^{すこぶる}明覈^{メイカク・あきらかにしらべる}、但**此實之を攻める後得る云云者、殊^{こと}に混^{混じり合う}を含むに似る、蓋し此證本是少陽陽明併病、下を用い法を失するを以て、徒^{いた}ずらに腸胃を擾^{みだ}す、邪が實と、依然^{もとのまま}具存^{具わり存する}者、程又曰く、去る者は雷^留める所に非ず、雷まる者は去る所に非ず、故に澹^{液のような便}者自ら澹、結者自ら結にして、結者既に結、澹者益^{ますます}澹矣、此說反^たつて直切^{ただしくねんごろ}を覺^覚える、又此證既に是^{これ}裏を兼ねる、乃ち宜しく蚤^{はや}く大柴胡雙^双解の法に従うべきに似れども、先ず小柴胡を用いるは、蓋し丸藥誤下を以て、續いて快藥を以てするを欲せず、仍^よつて姑^{しば}らく清和、以て胃安^{おちつく}を待つ也、且^{またそのうえに}其下利が故に壅實が大柴胡證より輕けれども、燥結は則ち甚^劇を有^たもつ、是以て大黃の實を破るを藉^{かり}らずして、殊に芒消の堅を軟らかくするを取る矣、校^校ずるに此方を以て大柴胡加芒消***と為す、原^{もと}と黃氏に出る、而^{しか}して宗印亦其說有り、

* 太陽中篇七十八條「傷寒十三日不解 胸脇滿而嘔 日晡所發潮熱 已而微利 此本柴胡證 下之以不得利 今反利者

知醫以丸藥下之 此非其治也 潮熱者 實也 先宜服小柴胡湯以解外 後以柴胡加芒硝湯主之」

***程應旆「傷寒論後條辨」清 傷寒論攷注太陽中篇七十八條に引用

「胸脇滿而嘔 少陽、日晡所發潮熱 陽明、此傷寒十三日不解之本證也、微利者已而のみ之證也、本證經而兼府、自是大柴胡湯、少陽陽明兩証 能以大柴胡下之、本證且罷、何有於已而下利、乃醫不以柴胡之辛寒下、而以丸藥之毒熱下、雖有所去而熱以益熱、遂復留中而為實、所以下利自下利而潮熱仍潮熱、蓋邪熱不殺治穀而逼^{おどす}液下行、謂云熱利是也、潮熱者、實也、恐人疑攻後之下利為虛、故復指潮熱以證之、**此實得之攻後**、究竟非胃實、不過邪熱搏結而成、只須於小柴胡湯解外後、但加芒硝一洗滌之、以從前已有所云、大黃并可不用、益節制之兵也、」

***参考

小柴胡湯 柴胡・黄芩・人参・半夏・甘草・生薑・大棗

大柴胡湯 柴胡・黄芩・芍藥・半夏・生薑・枳實・大棗

柴胡加芒硝湯 柴胡・黄芩・人参・甘草・生薑・半夏・大棗・芒硝

○軒熙曰、此條與_二次調胃條_一、其云_二十三日_一者、亦是約略之辭、或以為_二十餘日之譌_一者、殆未^レ是也、

○軒熙曰く、此條は次の調胃^{承氣湯}條とともに、其十三日と云うは、亦是約略の辭、或人にて十餘日の譌^{かわり}と為すこと、殆ど未だ是ならざる也と、

其一、柴胡加龍骨牡蠣湯證、是也、此以_二誤下_一、邪陷_二於裏_一、加以_二諸證錯雜_一、蓋壞之甚者矣、

其一、柴胡加龍骨牡蠣湯證*、是也、此誤下を以て、邪が裏に陥^{おちいる}、加えるに諸證錯雜^{いりまじる}を以て、蓋し壞^病の甚だしき者矣、

*太陽中篇八十一條「傷寒八九日 下之 胸滿煩驚 小便不利 讖語 一身盡重不可轉側者 柴胡加龍骨牡蠣湯主之 柴胡加龍骨牡蠣湯方 柴胡 龍骨 黄芩 生薑 鉛丹 人参 桂枝 茯苓 半夏 大黃 牡蠣 大棗 」

成氏曰、傷寒八九日、邪氣已成^レ熱、而復傳_二陽經_一之時、下^レ之_二虛_一其裏_一、而熱不^レ除、胸滿而煩者、陽熱客_二于胸中_一也、驚者、心惡熱而神不守也、小僂^{便不利}者、裏虛津液不^レ行也、讖語者、胃熱也、一身盡重、不^レ可_二轉側_一者、陽氣內行_二於裏_一、不^レ營_二於表_一也、與_二柴胡湯_一、以除_二胸滿而煩_一、加_二龍骨、牡蠣、鉛丹_一、収_二斂神氣_一而鎮^レ驚、加_二茯苓_一、以行_二津液_一利_二小僂_一、加_二大黃_一、以逐_二胃熱_一止_二讖語_一、加_二桂枝_一、以行_二陽氣_一、而解_二身重_一、錯雜之邪、斯悉愈矣、尤氏曰、傷寒下後、其邪有_下併_二歸一處_一者_上、如_二結胸下利_一、是也、有_下散_二漫一身_一者_上、如_二此條所^レ云諸證_一、是也、二說亦似_二精當_一、喻氏以為_二伏飲素積、為^レ變之最鉅者_一、叵^レ從、又此證一身盡重、與_二三陽合病、身重難_二以轉側_一、其機稍均、

成氏曰く、「傷寒八九日」邪氣已に熱に成りて、復た陽經に傳わる時、「下之」其裏を虚すれども、熱除られず、「胸滿」して「煩」は、陽熱が胸中に客する也、「驚」とは、心は熱を惡^くみて神を守らず也、「小僂^{便不利}」は、裏虚津液行^{めぐら}ず也、「讖語」は、胃熱也、「一身盡重、不可轉側」とは、陽氣内に入り裏を行^{めぐら}す、表には營^{めぐらす}せず也、柴胡湯を與え、以て胸滿と煩を除き、龍骨、牡蠣、鉛丹を加え、神氣を収斂して驚を鎮める、茯苓を加え、以て津液を行^{めぐらす}小僂^便を利す、大黃を加え、以て胃熱を逐し讖語を止める、桂

枝を加え、以て陽氣を行めぐらし、身重を解とく、錯雜いりまじるの邪、斯ここに悉く愈る矣と、尤氏曰く、傷寒下後、其邪が一處に併歸する者有り、結胸下利の如し、是也、一身に散漫する者有り、此條云う所諸證の如し、是也と、二説亦精當くわしくて正当なことに似のようである、喻氏以て伏飲素積平常から積む、變を為すの最も鉅おおきい者と為す、従うべからず、又此證「一身盡重」は「*三陽合病・身重難以轉側」と、其機からくり稍均ひとしい、

*陽明病四十條「三陽合病 腹滿 身重難以轉側 口不仁 面垢 讖語遺尿 發汗則讖語 下之則額上生汗 手足逆冷若 自汗出者 白虎湯主之」

○此當入兼變諸證中、然無類可附、仍列干斯、

○此當に兼變諸證中に入るべし、然れども類を附すべき無く、仍よって斯ここに列つらねる、

以上少陽病要領也、此他、有兼虛小建中湯證、

以上少陽病要領也、此の他、虚を兼ねるに小建中湯證有り、

出兼變虚乏中、

兼變虚乏卷第四の述兼變諸證・虚乏中に出る、

其愈、有振汗而解者、

其愈、振汗して解する者有り、

成氏謂經下裏虚、邪氣欲出、内則振振然、蓋原于辨脈法、其人本虚、是以發戰云云、軒熙曰、太陽病未解、脈陰陽俱停、必先振慄汗出而解、諸注皆為自愈之候、恐非、蓋振汗非太陽所レ有、脈陰陽俱停、想係邪在少陽者上、其病跨于表裏、故脈不偏見、猶是金匱脈兩出積在中央之理、倘用柴胡、而鬱邪離窟、則振汗而解也、下文、云汗出、云下之、俱指藥治、要是列舉三陽愈候者、故下三而解字、此說未知當否、姑錄備攷、

成氏謂う、下を経て裏虚す、邪氣出るを欲す、内入れれば則ち振振然、蓋し辨脈法*「…其人本虚、是以發戰云云」を原もととする、軒熙曰く「**太陽病未解、脈陰陽俱停、必先振慄惡寒戰慄汗出而解、」諸注皆自愈の候と為すに、恐らく非ず、蓋し振汗振慄汗出は太陽有る所に非ず、脈陰陽俱停、想うに邪が少陽に在る者に係わる、其病が表裏を跨またぐ、故に脈に偏見かたよりあらず、猶是金匱***「脈兩出、積在中央」の理、倘もし柴胡を用いて、鬱邪が窟巢を離れば、則ち振汗而解也、**下文に、汗出と云い、下之を云う、俱に藥治を指す、要は是三陽愈える候を列舉する者、故に三「**而解」字を下すと、此說未だ當否を知らず、姑しばらく録して攷考に備備える、

*辨脈法「問曰 病有戰而汗出 因得解者 何也 答曰 脈浮而緊按之反芤 此為本虚 故當戰而汗出也 其人本虚 是以發戰 以脈浮故當汗出而解也」

**太陽篇中六十六條「太陽病未解 脈陰陽俱停一作微 必先振慄 汗出而解 但陽脈微者 先汗出而解 但陰脈微者 下之而解 若欲下之 宜調胃承氣湯主之」

***五藏風寒積聚病脉證并治第十一

其傳陽明、有下為白虎證者上、

其陽明に傳わる、白虎證を為す者有り、

服柴胡湯已渴者條、可徴、

柴胡湯を服し已^{おえる}渴者條*、徴とすべし、

*太陽中篇七十條「服柴胡湯已 渴者屬陽明也 以法治之」

有_下為_二承氣證_一者_上、
承氣證を為す者有り、

經中多言^レ之、

經中多く之を言う、

其變或為_二太陰_一、或為_二少陰_一、或為_二厥陰_一、殆不_二一定_一矣、

其變或いは太陰を為し、或いは少陰を為し、或いは厥陰を為す、殆^{ほとんど}一定ならず矣、

變為_二三陰_一、經無_二明文_一、然太陽既變_二太陰_一、則少陽又未^レ可^レ不^レ變_二太陰_一、其變_二少陰_一者、近世甚多、如_二厥陰_一、則其部位、及寒熱勝復、並與_二本病_一、稍相類似、乃其變為、固其分也、

變じて三陰と為るは、經に明文無し、然れども太陽既^すで太陰に變われば、則ち少陽又未だ太陰に變わらざるべからず、其少陰に變わる者、近世甚だ多く、厥陰の如き、則ち其部位、及び寒熱勝^盛復^{くりかえし}、並本病と、稍相類似、乃ち其變為、固^{もと}より其分^さだめ也、

蓋以下_二其界_一表裏_一、所係不^レ一、而醫之失^レ治、多於_二此位_一、故兼挾變壞之證、少陽最多、而經中所^レ舉、不^レ過_二數章_一、學者當_二擴而充_一也、

蓋し其表裏を界^わける、係わる所一ならざるを以てす、而^{しか}して醫之が治を失するは、多く此位^{少陽の位置}に於てす、故に兼挾變壞の證、少陽最多、而^{しか}るに經中に舉る所、數章を過ぎず、學者當に擴げて充^みたすべき也、

吳有性著溫疫論、主_二疫邪自_一口鼻_一入之說_上、蓋膜原實少陽之部、而達原飲、三消飲、有_二地方之宜_一、或驗_二于今_一者_上、然審_二其主證_一、猶不^レ能^レ出_二大小柴胡之例_一、竊想當_二吳氏之時_一、邪勢暴厲、遽犯_二半表裏_一、故逐立_二其說_一乎、董氏西塘感症、引_二傷寒心法_一、稱_二見今世甚少_一太陽症_一、其書適與_二吳氏_一時世相近、可_二以證_一矣、世偶有_二墨_一守吳氏之法_一、忌^レ用_二桂麻_一、視_二柴胡_一為_二餘熱之治_一者_上、故附_二識于茲_一、

吳有性溫疫論を著し、疫邪が口鼻自^{より}入る説を主とす、蓋し膜原實^{もと}少陽の部にして、*達原飲、三消飲、地方の宜^{時宜}、或いは今に驗^{ため}す者有り、然り其主證を審^{つまび}らかにするに、猶大小柴胡の例を出る能わず、竊^{せつ}に想うに當に吳氏の時、邪勢暴厲、遽^{にわか}に半表裏を犯す、故に逐に其説を立てる乎か、董^{トウ}氏西塘感症、傷寒心法を引く、見るに今世甚だ太陽症少ないと稱^{とな}える、其書適^{まさ}に吳氏と時世相近、以て證とすべし矣、世偶は吳氏の法を墨^頑に守る、桂麻を用いる忌み、柴胡を視^{考察}餘熱の治を為す者有ると、故に茲^こに附^つけて識^しるす、

*「傷寒論攷注」太陽中篇五十五條「咽喉乾燥者 不可發汗」の案文に「咽喉乾燥、已に少陽陽明二症に属す、故に發汗を禁ず、吳有性の達原飲三消飲、方に是此の證、」の文あり

完 2009/08/04